



25 徳川斉昭像

御園繁

一面

明治二十二年（一八八九）

紙、コンテ

一三三・〇×一〇五・五

水戸藩主徳川斉昭（一八〇〇〜一八六〇）の家臣であった青山勇が、斉昭の御肖像がないことを遺憾に思い、面識のあった御園繁に制作を依頼した作品。御園繁は五姓田派の画家で、肖像画を得意としたことで知られている。本図は、擦筆画もしくはコンテ画と呼ばれる技法で描かれている。

コンテはチョークとも呼ばれ、主に酸化鉄などの顔

料を粘土や固着材で固めたものである。黒色が基本であるが、白や茶色などの製品も当時から存在した。コンテは、木炭や鉛筆と同様にデッサンなどにも用いられるものであったが、コンテを用いた擦筆画は習作とは全くことなる、むしろ油彩画と並んで肖像画に好んで用いられた技法と言えよう。コンテで描いた線等特殊な筆やネルなどの柔らかい布、そしてなめし革などを用いて擦ることで、線を見せずに自然なぼかしを生み出すことができるのが擦筆画の大きな特徴であり、それゆえに写真に劣らない写実的な表現が可能であるとされた。

本図は、明治二十二年五月に第一図目が完成し、これ

を写真師の鈴木真一が撮影したものを斉昭夫人と斉昭の子息徳川慶喜が高覧し、意見を加えるという形がとられた。慶喜から細かい修正意見が繰り返され、それから四回の描き直しを経て、ようやく翌年二月に本図が完成した。同一の図は最終的に三面制作され、宮内省、斉昭夫人、そして斉昭を祀る水戸市の常盤神社にそれぞれ奉納された。また、その擦筆画をもとに石版画が制作されたが、いま現在斉昭の肖像として流布しているイメージが、この肖像画である。ちなみにその出来映えに感嘆した徳川慶喜も同様の斉昭像を所望したため、御園繁はまた新たに楕円型の擦筆画（コンテ画）を制作したという。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治美術の一断面——研ぎ澄まされた技と美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 82

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sanjōmaru Shōzokan